

八

歳が贈る音楽×落語チャリティーライブがいよいよ今号の発行日に行われる。正月明けに保護者から話を聞いたときには、独演会なんてすごいこと考えるものだと思っただけ、さほど驚きはなかった。企画した小学校三年生、あーとの実績や本人の志向からすれば、突拍子もないことではなく、思いついたからには試してみたくてたまらなくなつたところだろう。

どうせやるなら、と本人の希望で県民会館中ホールを会場にした。大きな会場にお客さんがパラパラでは不憫だとする親の心配もどく風で、お客さんは少なくてもかまわないと言いつつ。ふたを開けてみたら前売り券は完売で、ぼくたち実行委員は、当日券はどこで入場を断つたらいいか、お客さんのクレームにどう対応しようか、などと当日の成り行きに気をもんでいる始末だ。あーとにこままでの見通しがあつたとは思えないが、自分がしたいんだからする、という徹底したアーティスト魂が結局は場をそれにふさわしいものにしていくのだろう。

昨日は、市役所にあーとや実行委員数名で市長に表敬訪問に行った。私は四年ぶりぐらいに着た現役時代のスーツとカッターシャツのチョーク攻撃に脂汗がにじむのをどうしようもなかった。ずっと前にこの日が

来ることは分かっていたのだ。でも、たった一日のために新調する気にどうしてもなれず、三十分の辛抱だと自分に言い聞かせた。主役はあーとで、私はただの同行者、はち切れそうなシャツとスーツに身を包んだじいさんなどだれも目にとめまい。

ダイエツトももちろん意識した。しかし、定年後の暮らしに合わせて増加した体重が、少々食事や間食を減らしたところで尻の突っ張りにもならず、早々にそんなことに気を遣うこと自体がばかばかしくなつてしまった。

「先生、スーツ姿、決まっていますよ」

「ははは」

笑おうと思うが、肺呼吸が通常通りできない。

「私、初めてなんです、先生、表敬訪問されたことありますか？」

あるわけがない。それはテレビの向こうの話で、我が身に降りかかるなど思つてもみなかった。

件の表敬訪問は、半袖ポロシャツで軽快に話題を繰り出す市長とまったく緊張とは無縁のあーとのやりとりがごく自然に和気あいあいと進み、予定時間を大幅にオーバーしても二人とも終始ご機嫌だった。

ボタンを飛ばさずに済んで安堵しているじいさんとえらいちがいである。

木幡智恵美

53

老い老いに

二

〇〇四年へと移つた年の初め、夕焼け通信に私が連載したのは『三歩、散歩、賛歩』だ。

通信発行開始の年に夫が解離性大動脈瘤で入院した。それを機に喫煙をやめ、酒も控えるようになった夫だが、仕事柄座ることが多く運動不足になりがちなので、夜歩くようにした。途中から愛犬エリーも加わつての散歩を続け、そこで見聞きしたり感じたりしたことを綴つた。

その散歩、今は私一人で続けている。エリーは十一年前に亡くなってしまったし、夫は脊柱管狭窄症で整形外科通いになり、歩くのは家の中くらい。短い距離でもすぐに立ち止まったり座り込んだりする状態で、私と一緒に歩けない。

連れがいなくなつてしばらくは長い距離を歩かなくなつていたけれど、歩く必要性に迫られたのは膝に水が溜まつてからだ。整形外科で診てもらおうと変形性膝関節症とのことで、週一回のヒアルロン酸注射を五回続けた。作業療法士をしている娘から、「軟骨が減るのは年だから仕方ない。周りで支える筋肉をつけなさいといけないよ」と言われ、はじめの頃は痛みを堪えつつ少しずつ、痛みが少なくなるにつれて距離を延ばすようにした。

事あるごとに「加齢」の言葉を突き付けられ、年々足腰が弱り、飛んだり跳ねたりは元より、坂を上るのさえ息が切れるようになってきた。できることと言えば、平坦な道を歩くことだけだ。今は午前午後、空いた時間に歩くが、酷暑の夏、早い時は四時半くらいから懐中電灯を提げて歩いた。二回目は、夕方少し気温が下がった頃、川べりを歩くと、気分的に涼しくなるのだ。

散歩はただ歩くだけではない。季節の移ろいを肌で感じる事ができる。年の初めは寒風の中、身を縮めながらも春の訪れを少しずつ見つけていく楽しみがあり、春はとりどりの色の花々を眺められる。夏の朝はオリオン座の輝きにうつとりし、暑さの残る夕刻にさつと風が吹きつけてくるのが心地よい。副産物もある。四月は蕨摘み。六月末から七月初めにかけては野イチゴ。毎朝採つたのを冷凍し、たまつたらジャムにする。暑い日にはバナナアイスにつけて食べると最高だ。先ごろは栗を拾い、栗ご飯にした。

そろそろ金木犀の香りが漂ってくると思うのだが…。



30代フリーター 高市早苗が自民党の総裁に就任した。反グローバルズムとポピュリズムの形を取って世界に広がるナショナリズムが、日本でも政治を大きく左右するフアクターになった。

年金生活者 ナショナリズム、とりわけ先進国に広がるナショナリズムの背景にあるのは、資本主義の高度化、言い換えれば第2次産業を牽引車とする産業資本主義から第3次産業中心のポスト産業資本主義への移行だ。この変化は富の稀少性の縮減を加速し、消費の過剰化、産業のソフト化、資本のグローバル化をもたらした。それらは、国家の権力の一部を分散させる方向に働いた。消費の過剰化は個人への、産業のソフト化は企業（市場）への、資本のグローバル化は国連に代表される国家間システムへの権力の移動を促した。

30代 それはナショナリズムとは逆方向の変化ではないか。

年金 分散した権力を手にした個人は相応の処遇を求めるようになり、それが「万人の万人に対する冷戦」を生ん

だ。企業（市場）は国家による統制を免れたぶんだけ競争を激化させ、貧富の差を広げた。さらに国家間システムへの権力の移動は国境の垣根を低くし、各国に移民・難民など外国出身の労働者の増大をもたらした。

それらはいずれも元からの国民の不満と不安を呼び起こし、その解消を国家に求める世論を広げた。「万人の万人に対する冷戦」は治安対策の強化を、格差の拡大は再分配システムⅡ社会保障制度の見直しを、移民・難民の増大はその制限を国家に要求する国民を増やした。

やがてその世論にこたえようとする政党が各国に誕生した。反グローバルズムとポピュリズムを特徴とするナショナリズムの政党だ。アメリカではトランプの率いる共和党MAGA派、フランスでは国民連合、ドイツではドイツのための選択肢、日本では参政党がそれに該当する。それらはアメリカ以外では、まだ政権を握っていないが、政権与党の向きを変えてしまうほ

どの勢いを見せている。日本の参政党は、石破政権によって左方向に振れていた自民党を右旋回させ、高市を党のトップに押し上げた。

30代 高市は女性初の自民党総裁になったが、マスメディアはそこに焦点を当てた報道をあまりしていない。

年金 彼女の当選は「女性の代表として」とか、「女性だから」といった理由によるのではなく、ジェンダーの別にはほとんど関係のない理由によるものだった。その点に限れば、高市が日本の第1党の党首に選ばれたことは、ジェンダー平等にとって、「女性の代表として」とか「女性だから」といった理由によるよりも、一歩前を進んでいると言える。

30代 高市はフェミニストから「名譽男性」というレッテルを貼られたりしている。

年金 彼女は女性であることを「売り」にせずに自民党のトップの座をつかむために、代償として「男社会」の論理を受け入れることを選んだ。選択

的夫婦別姓制度に反対するなど家父長的なイデオロギーを持つ安倍晋三を、自らの目指す政治家のモデルとした。

小池百合子も女性を「売り」にせず
に首都の知事の座をつかんだが、高市と違うのは「男社会」の論理を高市ほどは受け入れていないことだ。都知事に初当選した選挙で、男性優位のかたまりのような自民党を敵に回して勝利したことがそれを示している。彼女は、「女のくせに」とか「女だから」といった「男社会」からの難癖を寄せ付けない政治的な力量を備えていることを証明した。3選を果たした都知事選で連勝を圧倒した要因のひとつもそこにある。

30代 「女性の代表として」とか「女性だから」といった、いわば「女性枠」を使って、女性が行政や企業のトップや幹部になるのは、ジェンダー平等を前進させるために、必要かつ有効なことだろう。クオータ制はそれをシステム化したものだ。ジェンダーの壁に阻まれて教育や訓練を受ける機会

を奪われてきた女性にとって、ハンディなしの競争は圧倒的に不利であり、それを解消するための仕組みとして使われている。

年金 それは、ジェンダー不平等が残る段階での過渡的なシステムにとどまることも確かだ。競争社会を前提にし

ニュース日記 987
中村 礼治

ナショナリズムの時代

て言うなら、どんな女性でも、「女性枠」を使わない高市や小池のように、しかも、男性以上の代償を支払うことなく、組織のトップや幹部になる機会を持てるようにならなければ、ジェンダー平等にはならない。

高市の当選についてフェミニストの上野千鶴子は「初の女性首相が誕生するかもしれない」と聞いてもうれしくなく、「これで選択的夫婦別姓は遠のくだろう」とXに投稿していた。政治家の主張と地位は次元の違うものなのに、区別せずにものを言っている。同じ左派でも、辻元清美はそんな混同をしていない。「自民党では初の女性総裁、高市さん、ガラスの天井をひとつ破りましたね」とXに投稿した。アカデミズムや市民運動とは異なる政治の現場の経験を経た言葉だ。

30代 自民党は右旋回したまま進んで行くのだろうか。

年金 ナショナリズムは世界のトレンドになった。イタリアに続いて日本でも、女性がその流れの主役になった。